

## 岩手医科大学歯学会第 88 回例会抄録

日時：令和 2 年 2 月 22 日（土）午後 1 時より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C 棟 6 階）

### 特別講演

マイクロバイオーーム

— 生体の恒常性と病原性への関与 —

Maintenance of human homeostasis by microbiome and its involvement in pathogenicity

○佐々木 実

岩手医科大学微生物学講座分子微生物学  
分野

近年、次世代シーケンサー（NGS）を用いた DNA シーケンス技術の革新的進歩により、ヒト腸管をはじめ、口腔、皮膚などでは多くの細菌からなる複雑な細菌叢を構成している事が明らかとなってきた。すなわち、従来の培養法では検出できなかった培養陰性の細菌も多数検出され、ヒト腸管では数百菌種、百兆個から千兆個にもおよぶ細菌が常在していることがわかってきた。さらに、ヒトマイクロバイオーームの菌種多様性は宿主の健康、生体の恒常性を維持する上で重要であり、またその乱れ（dysbiosis）が局所、ひいては全身の様々な疾患と関連することも明らかとなって来た。

口腔のマイクロバイオーームも固有の細菌種から構成されている。腸管同様 NGS による解析から、数百菌種、約百億個の細菌が存在し、口腔の生理機能維持に役割を果たしている。口腔の 2 大疾患としてあげられる齲蝕と歯周病は口腔細菌による感染症であることは古くから知られている。それら疾患もミュータンスレンサ球菌あるいは Red complex species の局所での偏った増殖による口腔の dysbiosis によって発症するとも考えられる。しかし、各疾患患者の口腔マイクロバイオーーム解析から、必ずしもそれら細菌種が特異的に検出されるのではなく、

むしろ聞きなれない細菌種が多数検出されることや、口腔全体のマイクロバイオーームに偏りが生じていることも指摘されている。

本講演では、マイクロバイオーームと dysbiosis が口腔、全身の生理機能維持あるいは疾患に関与しているか、さらに当分野で行っている口腔の dysbiosis を引き起こし、病原性の発現に関与する可能性のある環境適応因子や局所定着因子などの細菌性因子について研究成果の一部を紹介した。

### 一般演題

1. 上皮成分と泡沫細胞の集簇との関連がみられた菌原性病変

Foamy cell aggregation in contact with epithelial component of odontogenic lesions

○武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野

目的：貪食作用と抗原提示作用を主とするマクロファージ（MΦ）が組織内に沈着あるいは浸透した酸化 LDL を貪食し、胞体内に充満させると泡沫細胞（FCs）と呼ばれる。この FCs が集簇することによって周囲組織に病的変化をきたし、動脈硬化症、慢性炎症、免疫異常などの全身性あるいは局所性の病変を形成する。口腔領域では、FCs の集簇は慢性根尖性歯周炎でみられることが多いが、粘膜病変としては疣贅状黄色腫（VX）がよく知られている。VX は重層扁平上皮の乳頭腫様増殖と上皮脚間に限局した泡沫細胞の集簇を特徴とする病変で、その成り立ちは明らかではないが、何らかの因子による過形成上皮に由来する脂質を貪食した MΦ が集簇して病変を形成すると推測されて